

- 会)。
 霧対策連絡協議会, 1981: 釧路・根室地方における霧対策の概要, 釧路支庁, p. 59.
 黒岩大助・大喜多敏一, 1959: 最近の霧の研究とその展望, 気象研究ノート, 101, 247-294.
 Mason, B.J., 1971: The Physics of Clouds, 2nd ed., Oxford Monographs on Meteorology, Oxford Univ. Press, p. 671.
 Meteorological Office, 1967: Meteorology for Mariners, Her Majesty's Stationery Office, London, p. 304.
 Pettersen, S., 1940: Weather Analysis and Forecasting, McGraw-Hill, New York, p. 505.
 Rodhe, B., 1962: The Effect of Turbulence on Fog Formation, Tellus, 14, 49-86.
 斎藤 実, 1963: 勇払原野の霧, 研究時報, 15, 333-353.
 札幌管区気象台, 1964: 勇払原野における霧の調査報告, 研究時報, 16, 69-83.
 高橋浩一郎, 1943: 霧の発生について, 気象集誌, 21, 142-147.
 Taylor, G.I., 1917: The Formation of Fog and Mist, Quart. J. R. Met. Soc., 43, 241-268.

増田善信 著

数値予報

—その理論と実際—

気象学のプロムナード 3

東京堂出版, 1981年12月刊,

A 5判, 278頁, 3,200円



現在までの数値予報を学ぶには格好の書であり読みやすい。構成は7つの章と2つの付録からなる。第1章「数値予報の歴史とその理論的背景」, 35頁。論理の展開上不要な式および式の導出を一切はぶき, 必要な式をいねいに書いてある。簡にして要を得た章である。第2章「予報モデルの変遷」, 37頁。バロトロピックモデルから準地衡風モデルを経て非地衡風バランスモデルまでを気象庁ルーチンモデルの発展に即し, 例をあげて説明している。第3章「プリミティブモデル」, 26頁。地衡風調節, 積雲対流のパラメタリゼーション, 境界層のパラメタリゼーションを論じ, 気象庁ルーチンモデル——6層ファインメッシュモデルおよび4層北半球モデル(現在はそれぞれ10層および8層)——を説明する。第4章「数値計算上の諸問題」, 25頁。少ないページ数にとってもコンパクトにまとめてある。計算スキームについて, ひとつおりの理解が出来る。第5章「数値予報と天

気予報」, 17頁。数値予報から天気予報への翻訳とその問題点の説明がある。第6章「客観解析とイニシャルゼーション」, 28頁。6つの客観解析法についてそれぞれの原理をわかりやすく述べている。修正法については気象庁ルーチンモデル(現在は最適内挿法)を例にあげ説明している。第7章「予報可能性と延長予報」, 47頁。中期予報の現状, これからの問題点が論じてある。

「全体を通してわかりやすく実によくまとまった本」というのが読後の印象である。特に第1章後半から第4章までに数値予報の「骨組み」の事項がわかりやすく書かれている。「コーヒーでも飲みながら楽しく気象学の森の中のプロムナードを散歩するつもりで……。」という編集方針どうりの本である。ただ残念なことは, この本には索引がない。いまからでもつけてもらえないだろうか。よい索引はこの本の利用価値をさらに高めると思う。

何度も言うようだが, 実に読みやすく楽しい本であった。この本は「数値予報」の本であり, いわゆる「気象力学」の本ではない。この特徴故に貴重な本であり, またギビナーにとっても数値予報の哲学を知るうえでありがたい本である。

(大野久雄)